

マレビトライブ vol3 「N市民 緑下家の物語」③

N市、繁華街ハマノ町、ナカシマ川周辺のベンチや路地裏にて

血相をかえて走っている陽にファンの男が話しかける

「あ、こんにちは。ぼくです、ぼく」

「あれ。覚えてませんか」

「なにしてるんですか」

「今日は世直しアイテムないですね。仕事じゃないんですか」

「おれ、おまえなんかと喋ってる場合じゃないから」

「どうしたんですか。なんか、顔色悪いですよ」

「おまえにおれの顔色がわかってたまるか」

ファンの男、偶然、めまいを分かち合う女と出会う

「あ、こんにちは」

「どうも」

「冷たいコーヒー飲みませんか。よぶんに買ってしまつて」

「え、いいんですか」

「ええ。なんか、二つ買ってしまっているんです。気がついたら、変な風にとらないでくださいね」

「あ、ほら、あそこ、ぼんやりした女の人いるでしょう。あの人ね、自分の名前がわからないんです。あの人と私、街で出会って一緒に仕事するようになったんです。派遣の仕事なんだけど、お掃除する。留守宅とか、掃除できない主婦とかいるでしょう。二人でペアになってきつ

たないお部屋を、夢中で掃除するんです」

「へえ」

「三上さーん」

「あ、気付いた。三上さんって私が名前つけたんです。名前っていうか、苗字ですけけどね。彼女もう、三上さんって苗字になれちゃって、三上で生きて行くことにしたんです。でも、まだ、名前がなくて」

「ああ、名前か」

「あ、三上さん、こんにちは」

三上さんと呼ばれているユミは、三上という苗字に、初めて戸惑う

「こんにちは」

「こんにちは」

「暑いですね。三上さん」

「はい」

「今日はお休みだったけど、何してた？」

「え、三上さん？」

「あれ、どうしました」

「いえ、ああ、ちょっと、なんか、いや、私、初めて、こんな気持ち」

「どうしたの」

「私、いま、突然、三上って苗字じゃないって思ったし、名前だっじゃないなって思って、で、履歴書書いたとき、あなたにまかせたのもおかしいことだなって。じゃ、私は一体誰って言われたら、途端にわからなくなるんだけど」

「なに言ってるの。私は人助けだと思って、やってあげたのに」

「私は、しばらく考えてみたわ。私の名前を、でも思い出せなかった」

「でも、今のこの、私じゃないってことだけは、なんとなくわかる」

めまいを分かち合う女は橋の上に佇む。陽のファンに話かける

「あのとき、ミックで、私のめまいを支えてくれて、ありがとう。でもね、私はこれまで、いろんなものを分かち合ってきたわけです。言葉とか、神様への思いとか、まあ、めまいとか、でもどれも抽象概念でしょう。だって、私はお肉のかたまりでしょ。そのとき、重さはどうだったかなんて思うのよ。私の肉の重さをあなたと、もう一人の人は分かち持ったというわけね。そのことをあれからずっと考えていて、はっとした。私を分かち合うことは考えたこともなかったって。どういうことかって言うと、私は私のお肉が貪り食べられることを想定していなかったってこと。これは重大な過失。だから、私は私自身のお肉をあなたと分かち合いたい」

夢遊病ソング featuring めまい

いつだって夢心地な私。

いつだってめまいな私。

あてにしないで職歴なんか。

そでにしないで私のつまずき。

バイトバイトー派遣のバイトーッ

バイトバイトー国民年金自己負担。

明日は、昨日の続きなんて誰が決めたの。

昨日のままで目覚めたときにはめまいの果てだった。

ああ、現実／むゆうびょー

ああ、現実／めーまーいー

三上サーン、

いいえ私は記憶喪失、そんな名前じゃなかつたのー。

稲光と虹見江波との対話「関係の境目」

「緑下くん、待った？」

「あ、いや」

「だって、待ったでしょ。なんでそう言わないの」

「ああ、まあ」

「めんどくさいの、おこったりするの」

「いや、とくに、そんなこともないけど」

「暑いね」

「うん」

「ね、緑下くん」

「はい」

「今日、暑いって言ったら、だめよ」

「どうして」

「どうしても。ね、我慢して」

「ああ。うん」

「言いたくなくても、我慢して、ね、我慢よ、我慢、緑下くん」

「虹見さんは、どうなの」

「なに」

「虹見さんは、いや、虹見さんも、言ってはいけないよ、暑いって」

「あ、虹見さん、はいいの」

「なんで」

「不公平じゃないか」

「カラスに鳩が襲われる」

「あれから、私たち、何回会ったかしらね」

「さあ、どうだろう」

「何回目？」

「数えてないからな」

「週に一度は必ず会ったわ、私たち」

「そうだね」

「なんかね、私、最近緑下くんに会うの楽しみになった」

「え、ほんと、虹見さん、おれも、おれもだよ」

「わー。緑下くん」

「わー。虹見さん」

「ね、これって、関係の境目なのかな？」

「さあ？」

「小説、書いてる？」

「書いてるよ」

「あれからどうなったの？」

「どうって、読んでないでしょ」

「読んだわ」

「え」

「すきをみて、ぱぱっと、読んでみた」

「うそつけ」

「読んだって」

「私たちのことが書かれていたわ」

「ほー。そうか。そうか」

「読んだんだって」

「まあ、いいけど」

「どっか、行く？」

「うん」

ユング派の心理学者「月牛実」の登場

「あ、月牛さん」

「やあ、虹見さんじゃないか」

「なにしてるんですか」

「歩いてるよ。見てわからないかい。で、きみに呼び止められて、いまは、立ち止まったってわけだ。はっはっはっ」

「お散歩ですか」

「はっはっはっ」

「大学の先輩の月牛さん」

「ああ、どうも、こんにちは」

「えっと、いつぞや、お会いしたかな」

「ええ、一度。緑下と言います」

「ああ、えっと、そうそう」

「あまりに夢と現実の区別がつかない人がいるって言って紹介した緑下稲光くん」

「ああ。緑下さん」

「ええ」

「で、月牛さん、こんな典型的な人って、逆にめったにいないってことになって、心理分析したいってことになって。このあいだ、ミックで一緒にお食事したじゃないですか」

「ああ。そうだったそうだった。ま、ここで、立ち話もなんだから」

月牛実、稲光の深層心理を語る

「これは、きみ自身の問題というより、たとえば、大きな出来事がきみにどうしようもないことと同じように、きみには、いろんなことがどうしようもないじゃないか。たとえば、大地震。大津波。それに、この街がかつて原爆で消えてしまったこと。ね、きみならどうする」

「何が言いたいのですか」

「きみはひとりで生きているわけではないと言いたい。さまざまな要因がきみに影響を与えている」

「そんなことあなたに言われなくたって、わかってます」

「わかってる、のはきみだろ。きみの責任においてだ。それを、過信というのだよ。あらゆる大事件は忘れた頃にやって来るんだ」

「誰かが、洪水のように夢を産み出している。子供を産むような感じではなく、その人本人にも夢の産み出しの自覚がないような無責任さで、夢は産み出され、その中で、きみは木の葉のように翻弄されている。そして、その誰かというのは、きみの最も身近かな誰かなんだ」

「わかるかな」

「わかりません」

「それは、女の人ですか」

「産み出すと言ったじゃないか。つまりは緑下くんの母なるもの。グレートマザーさ」

「緑下くんのお母さんは、島で心臓病を患ったお父さんを看病しているわ。そんな夢の産み出しなんかしてる場合じゃない。ね、そうでしょう」

「え。なんの話なんだ。これは」

「ってことは、お姉さんね。やっぱりお姉さんなのよ、夢を見てるのは。緑下くんも私たちもお姉さんの夢の中にいるんだわ」

「そんなわけないじゃないか」

「じゃ、私はこのへんで」

「あ、もう帰るんですか」

「散歩のつづきを、なんて、優雅なこと言いたいところだが、ユング学会N市支部の人たちとの食事会に行かねばならんのだよ」

「そうですか、残念だな。今度、どっかおいしいところ連れてってくださいね」

「ああ。いいよ。じゃ、また、虹見さん。お元気で」

「失礼します」

「ちえっ。エセ文化人野郎」

「え、なんか言った？」

「ユングなんか研究してるってことは、おれは化石のような心理学者ですって宣言してるようなもんじゃねえか」

「聞こえない」

次男の予言

「稲光、稲光、稲光」

「え。」

「陽兄さんが死ぬぞ！」

「ええええええ！」

「どうしよう」

「ああ。あああ。予言が、来た。次男兄さんからの予言だ。陽兄さんが死ぬ！」

「死ぬ死ぬ。陽兄さんが死ぬ」

「とうとう。とうとう、死んでしまうんだ」

小さな路地、ラブホテルの近くで女が佇んでいる

「抜けた毛、よだれ、剥がれたかさぶた、垢、私のだったけど、ほんとに？これで私をわかることはできないけど、少しは辿れる？今は境目、世界との、落下中のようなもの、することもされることもない場所、ほんとに？今が夢じゃないって言える？ほんとに？どうかな？たくさんのもんさしで測るの？神様の、お金の、科学の、音楽の、その他諸々、線が溶けて線じゃなくなるまで、そんな世界の愛液でありたい、ほんとに？わからない」

小さな路地、突然、血相をかえた陽が顔を出す

「稲光、おれは追われているんだ。くそつたれみたいなへっぽこ右翼組織から。ああ、ああ。イモばっかだぜ！屁も出ねえ。くっくっく。ボスが市長を日本刀で殺しそこなって、そんなことで捕まるのはかっこ悪いからって（犯行に使った刀が手入れ不足で錆びてたそうだ、シヤレにもなんねえ）、おれに罪を押し付けるつもりなんだ。なんて、卑怯な男だ。卑劣極まりない。畜生。ああ、ああ、おれはどうしたらいい。稲光、おれを助けてくれ！」

「天皇陛下万歳なんて、おれは死んでも言わないぞ。どうせなら、おれの子孫を天皇家に残して逝ってやる。皇族の娘ひっつかまえて、やってやってやりまくって、おれはこの世界に生き残る。いいか、稲光、よく聞け。おれは、あのやんごとなき家族のなかで生き残ってみせるぞ。おれの魂は、東京の中心で、真っ白な柱になって、すべての天変地異を支えてみせるんだ。まるでキノコ雲の竿の部分みたいにな。安心しろ稲光、おまえは凡人だ。安心しろ稲光、おまえ

はおれの平和な国民だ」

虹見江波への夢の告白「結婚式の記念写真」

「聞こえない聞こえない。ときどき、緑下くんの声が私にはちっとも聞えなくなる」

「昨日の夜、おれは夢を見た。おれと虹見さんが結婚するんだ。あ、聞こえてる？」

「うん、いまは、聞こえてるよ」

「すると、おれたちの結婚写真の記念撮影にたくさんの人たちが集まってくれたんだ」

「へー、変な夢」

「それがまさ夢かどうか、確かめに行こう」

「え」

「ね、虹見さん、きみと一緒に確かめてみたいんだ。昨日の夢のことを」

「走ろう。その場所まで」

「走ろう。世界の地の果てまで」

「走ろう。私たちの現実まで」

「手に手を取り合って」

稲光の夢の結婚式場は街角の古びた建物にあって、そこにN市民たちが集まって二人のために記念写真を撮る。そのとき式場の案内係の女が、まるで司祭のように二人の結婚を祝福してくれた。そのことほぎの言葉。

稲光さん江波さん、あなたたちは結婚し、夫妻となろうとしています。

フェラチオとはシンフォニーです。

出すことにこだわることなかれ、

時間にこだわることなかれ、

量にこだわることなかれ、

愛にこだわることなかれ、

常に吸い、舐め、しゃぶりつくしますか？

死が二人をわからあい、命の日の続く限り、意思をも超えた互いの絶頂を望みあい、与える者は与えられ与えられる者は与える三位一体の調和を約束しますか？

クニリングスもまた同じく。

和を持って尊しとなす。

路地に潜伏している陽に幼なじみの泉野鏡子が話しかける

「泉野です、私。緑下くん、ですよ。私、小学校のとき、同じクラスだった、泉野です」

「ああ、泉野さん」

「緑下くんと、一緒に海水浴に行ったとき、帰りの電車から、灯台の明かりを見た。まだ、点き始めのころで、無人の灯台だったから、あれは、なんか、暗くなるのに反応する機械がついているのかな、なんてことを話したのを覚えてる」

「ふーん」

「忘れた？もう、そんな昔のこと」

「あ、いや」

「私は、覚えてる」

「走馬灯だ。これは死ぬ前に見るっていう走馬灯なんだ」

「いいえ、私は、泉野鏡子です」

「ひゃああああ」

泉野鏡子のことを死神的なものだと勘違いした陽は稲光に助けを求める

「稲光、おれは、あんな女知らないんだ。でも、おれのあとをついて来る。ただ、知らないと言っても、何となく見覚えがあるような」

「どの人だよ」

「あいつだよ、あいつ。あれ、ほら、女がいるだろ」

「わからない」

「最後に、ユミ姉さんにも会っておきたかった」

「なに言ってるんだよ」

「ああ！なに言ってるんだ。おれとしたことが。おれとしたことが。おれは、どうかしている。おれは、おれ自身で災難をおびき寄せるくせがあるんだ！」

「だいじょうぶ。兄さん」

「おまえ、ちょっと触ってくれ。おれを触ってくれ」

「どうだ、どうだ、おれは大丈夫か」

「兄さん、ちょっと痩せたな」

「ちえっ、そんなことどうだっていいだろ」

稲光の姿をした次男と陽の会話、偏在するおれ。そんなときに、ファンがちょっかい出す

「おれは偏在している。たとえば、おれはあらゆる書物である。街角の広告だ。おさわり風俗嬢のクリーム臭い指紋だ。どんな場所でも、おれは顔を出す。誰でもない誰かの顔になって、おれは顔を出す」

「次男か。おまえは、次男なのか」

「そうだよ、兄さん。やっと気付いてくれたね。おれは次男だよ」

「ああ。おまえになんか、会いたくなかった」

「この期に及んで、そんなことを言うなよ。こんな言葉がある。こいつは愚かにも全世界の火災を洗面器で消そうとしている。おまえに似つかわしい言葉だ」

「おまえとはなんだ。弟のくせに生意気言うな」

「死者としてはおれはおまえより先に生まれたんだ」

「あああああ！」

「うえるかむ。うえるかむ。うえるかむだよ」

「あああああ！」

「おまえを軽蔑しているんじゃない。びくつくことないんだ」

「なんにもいいことなんてなかったよ」

「そんなことを言う、おまえのことが、おれは大好きだ」

「行こう。大丈夫大丈夫」

「あれ、ちょっと、ぼくっす。ミサエと離婚しました。おかげさまで、なんか、ふっきれました。ま、いろいろありますが、なんか、養育費とかなんか、いるんですけどね、月々大変なんですよ。どこ行くんですか。なんか、ぼくのこと一般大衆的にあしらってませんか。ま、いいけどさ」

陽がボスの組織から拉致される

「あ、兄さん。陽兄さん」